

あなたしかできない作品を

オーサービジット・絵本作家の宮西達也さん／北海道八雲養護学校



生徒・先生の皆さんと宮西さんと記念撮影



(写真上)遠隔で授業を受ける生徒に、作業方法を説明する宮西さん
(写真下)夢中になって絵を描きます

「人間は、何をしたかじゃない。どういうふうに住きたか。どんなにすごいことやっても、人に恨まれたり、憎まれたら人生つままないね。それよりも一生懸命やってる人のほうが素敵。だから、一生懸命生きて下さい」。

そう生徒に投げかけたのは、絵本作家の宮西達也さんです。「ベルマーク版オーサービジット」が北海道八雲養護学校(佐橋正智校長・生徒17人)で11月1日に開かれました。

本の著者(オーサー)が学校を訪問し(ビジット)、特別授業をする、朝日新聞の人気企画のベルマーク版です。自校に

来てほしい気持ちを生徒が色紙に寄せ書きし、それを読んだオーサーが訪問する学校を決めます。

生徒を前に、校長はこう言いました。「先生が来てくれたことは、奇跡。なぜこんな奇跡が起こったかという、君たちのお父さんお母さん、それからのその先輩、そのまた先輩が、ベルマークの活動を続けて、積み上げてきたから。奇跡のウラには地道な努力がありました」。

同校はベルマーク運動に参加してからまだ5年しか経っていません。それでも、授業の開催に必要な3万円のベルマーク預金を着実に積み立てました。

「こんにちは。おじさんが、あの有名な宮西達也だぞ」。宮西さんの第一声は茶目っ気たっぷり。そして、「まずは、絵本を読んでみよう」。なんと著者本人による読み聞かせです。

「まねしんぼう」は、宮西さんが小さかったときの弟のことを思い出して描いた作品だそうです。「みんなが今うれしな、楽しいな、感動したなって感じる心はとても大事。勉強も大事だけどそれ以上に大事なものは心にあるんだよ。それがみんなを素敵な大人にしてくれます」。

いよいよ作業に入ります。「絵本は動かないから、読んでる人、聞いている人が、

頭の中で動かすんだよ。だから感性豊かになる」と宮西さん。黒とオレンジの2色だけを使って、ダンボールに好きなものの絵を描き、切りとっていきます。時折真剣な表情を見せながらもみんな笑顔が絶えませんでした。

その後、大きな額ぶちの中にみんなの絵を貼りつけていくと世界で一つだけの作品が出来上がりました。

授業後、佐橋校長は「勉強は教えられても、感性や感受性を育む機会が不足しているので、みんなで一つのものをつくりあげる活動は、とてもいい機会でした」と宮西先生への感謝を述べました。

マークのこと「もっと知りたい」

小3ベルマーク少年

岐阜市立西部小学校に通う山内滉稀くん(3年)は大のベルマークファン。夏休みに図書館で「ベルマークのひみつ」(高井ジロル著、2006年日本文芸社刊)という本を見つけ、感動して、課題図書でもないのにこれで読書感想文を書いたそうです。枕元に置いて寝るほど気に入って、返却期限が迫ると号泣したそう。かわいそうなので、お父さんの政弘さんが売っているところを探したのですが、なかなか見つかりません。

問い合わせを受けた財団職員が、たまたまこの本を持っており、譲ってあげることにしました。本を送ると、丁寧なお礼の手紙が。「本当にありがとうございました」滉稀くんはクラスで同級生に呼びかけてマークを集めているそうです。これからはマークを仕分けるボランティア活動やイベントにも参加して、ベルマークの事をもっと知りたいと思っているとのこと。滉稀くん、頑張ってくださいね。



滉稀くん、これからも頑張ってくださいね!!



ヴァンフォーレの試合でマーク回収

J2今季最終戦、山梨中銀スタジアム

サッカーJ2ヴァンフォーレ甲府の今季リーグ最終戦があった11月17日、会場の山梨中銀スタジアムで恒例のベルマーク回収イベントが実施されました。

ヴァンフォーレ甲府、スポンサーのはくばく、ベルマーク協賛会社のあいおいニッセイ同和損保(ベルマーク番号92)山梨支店、同損保の地元代理店さいとうエージェンシーの4者が2013年から毎年実施しています。マークを5点以上持参すると抽選で景品が当たるため、

一時は50m近い列ができました。選手たちのサインボールを当てた向山蒼真くん(6歳)は、喜びのあまりぴょんぴょん飛び跳ねます。お母さんの由起子さんは「1年間ベルマークをためて持ってきたかがありました」。さいとうエージェンシーの齋藤寿人社長は「会場に来られないからとマークを郵送して下さる方もいる。ありがたいです」と話していました。マークは財団に贈られ、東日本大震災被災校などのために使われます。



ボールが当たったよ